

木山捷平文学における韜晦性

定金 恒次

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2012年10月1日 受理)

1 はじめに

木山捷平(1904～68、昭和37年度芸術選奨文部大臣賞受賞作家)は強烈で多彩な個性を持つ作家である。したがって、その文学的特徴もまたさまざまな名称を付与することができる。例えば、「無頼派作家」「ユーモア作家」「飄逸作家」「庶民作家」「反骨作家」「反戦作家」「望郷作家」「自虐作家」「教育小説家」「飲酒・愛飲文学の達人」「田園文学の第一人者」等々、数多くの特性語が冠せられている。そして多くの読者に親しまれ、その人気は年々高まっている。

さらには、木山捷平の作品には韜奇性(すぐれた才能をつつみ隠すという性質)ないしは韜光性(才徳を隠して表に出そうとしない傾向)という特徴も著しく内包している。つまり、木山捷平は小説執筆に当たって、自分の分身である主人公を現実の自分よりもはるかに低い身分、劣等な人間、劣悪な境遇の人物として設定し、描いていくのである。本稿では、こうした木山捷平の「高晦癖」(高^{こう}い志^{かい}を持ち、才能を包み隠すという性向)、ないしは木山捷平文学における「韜晦性」(自らの才能や学問をつつみ隠そうとする性質)に焦点を当てて論じてみたい。

2 韜晦の手法

木山捷平が作品中で自ら(身内^{みうち}や家族を含む)を韜晦する手法は、次の三つの類型に集約することができる。

- (1) 身分や地位などを低く設立して登場させる。
- (2) 出自や境遇などを劣悪なものとして登場させる。
- (3) 才能や能力などを劣等な人物として登場させる。

以下、これらの事例を作品に即して具体的に明らかにしていきたい。

(1) 身分や地位などを低く設立して登場させる。

作者自身は姫路師範学校本科第二部を卒業し、兵庫県出石町立弘道尋常高等学校小学校の「訓導」職であったのにもかかわらず、「出石」「出石城崎」「掌痕」「氏神様」などの小説では、自分の分身ともいえるべき主人公(または作中人物)の身分を「代用教員」として登場させている。

「出石」(処女作)では、中学卒の代用教員末川大吉の10年前の思い出話として、次のように書き起こされている。(圈点は筆者が付す。以下同じ)

東京に震災のあった年だから、かれこれ十年も前のことである。鳥取の中学を卒業した私は、いろいろな家計の破綻もあって、但馬の出石^{いづし}という小さな町で代用教師をつとめたことがある。私はその後、東京に出て苦学しながらK大学を出て、今では郊外の私立中学の国語教師をして、兎も角も落ち着けているが、どうかするとあの一年間の出石時代のことを思い出すのである。(中略)十年前の春、私は代用教員として、はじめてこの町に赴任したのであるが、しかし青雲の野望に燃えていた私にとって、何処となく活気のない町は、ぴったりとそぐいはしなかった。昔藩校のあった跡に立っている古びた校舎の二階の窓から、四方の山に咲いている名も知らぬ白い花を眺めながら、私は深い溜息をついたものだった。

けれども私は新しい胸のさびしさを抑えながら、中学の小倉の洋服をつけて堂々と学校に通った。学校には教師が十八人いた。その姓名が職員室の壁に月給順にぶら下げてあった。私はその十七番目であった。十七番目に代用教員末川大吉と書いた木札がぶらさがり、その次にもう一つ代用教員柚木ナミという木札が並んでいた。

大正12年姫路師範学校を卒業して赴任した作者木山捷平は、実際には出石町立弘道尋常高等小学校で20名中の第5席の「訓導」として2年間勤務したにもかかわらず、小説では第17席(末席から2番目)の代用教員(末川大吉)として登場する。そして1年間、不遇な地位であるがゆえの悲哀を味わいながら教職の任を果たすというストーリーを展開するのである。

「出石城崎」(「出石」を改題したもので、木山捷平の初期を代表する名作となる)では作者の分身である末川大吉が、現在勤めている中学校の同僚教師「私」に、かつて代用教員をしていた時代の思い出を語るというストーリーである。作品では次のように綴られている。

……大正十二年の春鳥取の中学校を卒業すると直ぐ、僕は色々家計の都合もあって但馬の出石という町に代用教師となつて行つたのだ。(中略)町の真中を一条の川が流れて、土地の人は出石川と呼んでゐた。たいして大きい流れではなかったが、橋の上から眺めると何時も川底の小石が水の上に泛んだように綺麗に澄んで、川魚の上り下りする姿までがはっきり見えるのであつた。

けれどもその頃の僕にとって、そんな町がぴったりとそぐう筈はない。昔、藩校のあった跡に建っている、古風な小学校の石門をくぐる度に、思わず太い溜息が出た。学校には教師が十八人いた。その姓名が職員室の壁に月給順にぶら下っていた。僕はその十七番目であった。十七番目に代用教員末川大吉と書いた木札がぶら下り、その次にもう一つ代用教員柚木ナミという木札がぶら下っていた。僕は何より先ず柚木ナミなる木札に親愛を感じた。十七番目の木札と十八番目の木札とが仲よく話でもして

いるかのように思われた。そしてそれは木札ばかりではなく、下駄箱も帽子掛けも机までが誰かれの最後に二つ仲よく並んでいた。しかも僕は尋常三年生の男生を、彼女は尋常三年生の女生を、受持つことに決められたのであった。……

小説の中では、こうして新任の代用教員末川大吉が同じ職場の代用教員柚木ナミと出会い、互いに末席同士という不遇をかこち、いたわりながら、親密かつ清純な交流と絆を深めていくのである。

「掌痕」では作者の分身として松田修三が登場する。彼はかつて但馬の出石の町で代用教員として働きながら独学で英語を勉強し、外国語学校に進学。卒業後は某々省属として細君と共にその日暮らしの生活をしているが、ある朝、門札を盗まれていることに気づく。実はこれは代用教員時代、和田窓外という同郷の先輩教師から記念として贈られた愛着の深いものである。そこで窓外先生のことを思い出すとともに、この門札を書いてもらった経緯を語るのであるが、この小説の舞台となる場面が次のように設定され、事件が展開されていく。

……もう一昔も前のことである。修三は鳥取の中学を卒業して外国語学校に入るまでの一年間、但馬の出石という町で代用教師をして暮した。其処は山と山に囲まれた小さな城下町で、「大江山生野の道」よりも更に北へ十何里かの偏僻である。山奥のことで、教員も土地の者だけでは足らぬのを幸い、資格のないや前科を持つ教師がこの地帯に集まっていた。山陰線江原駅に下車すると、三里の山道を馬車に揺られて、彼はその町に辿り着いた。馬車の終点で降りると町の一方に屹立した城趾の山に、点々と辛夷の花が咲いていた。それがひどく彼の二十の旅情を掻きたてた。

彼は学校の小使の斡旋で川向うの一人暮らしの婆さんの離れを借りた。(中略) どうにも動きのとれない場所へ世間は自分を押しやってしまったように思われた。でも彼は仕方なさそうに学校にでると、天井の低い職員室の一番下座の椅子に腰掛け……

婆さんの離れが彼の下宿であり、ここへ度々訪れる和田窓外と出会う。年配の窓外は、酒と女性関係が原因で左遷を繰り返し、今は山奥の分教場に勤めているが、度重なる挫折にもめげず、自分の掌に錐を突きさして眠気を覚ましながら、習字と国漢の文検合格をめざして精進を続ける熱血漢である。その心意気に魅せられた代用教員松田修三は窓外に鼓舞されて勉学に励み外国語学校に進む。今朝盗まれた「松田修三」なる門札は窓外に書いてもらった由緒あるものなのである。

「氏神様」では正助なる人物が作者の分身として登場する。作中の正助は東京に出て、小学校教師として平凡な暮らしをしているが、生まれ故郷の田舎のすばらしさを一人息子の子郎に見せてやりたく、10年ぶりに夜行列車で東京を発ち、翌日内海に面した港

町（暗に笠岡をさす）に着く。そこから2里の道を歩いて故郷の村の氏神様へ参る途中、峠の茶店で食事をする。見覚えのある茶屋のおかみと東京から郷里を訪ねて来たことなど、懐旧談に花を咲かせる。そして、おかみから「それで、あんたは東京で何が出来ますかな？」と尋ねられ、「僕は小学校の教員をやりります。」と答え、あとの言葉に窮する。その時の心境（独白）が次のようにつづられている。

文部大臣や大学教授ならいざ知らず、小学校の教師をやりに態々^{わざわざ}東京まで行かなくても、小学校ならこの辺にいくらでもありましようが、とおかみに打切棒^{ぶっきらぼう}に突っ込まれそうな気がしたからである。彼自身、始終東京の小学校教師達を見ながら、それをいつも不審に思っていた。何を好んで田舎を捨てて東京の小学校教師になって齷齪^{あくせく}しているのだろう。が、彼もその一人なのであった。しかし彼は以前のこと（筆者注＝作中で風紀紊乱罪^{びんらん}で逮捕されたことをさす）がたたって、又病弱で、小学校教師の中でも、普通の訓導というのではなく、代用教員というのだった。その代用教員もちゃんとした職場が極ったのではなく、人々は彼のような代用教員のことを円タクとか廻しとかいう代名詞でよんでいた。多くは女教員が産前産後の休養で休んでいる間、補欠で一、二ヶ月ずつ授業をし、又次の産前産後の方へ移動して行くのである。東京は広く、そういう口が次々に待っており、当局も亦彼のような存在を大いに必要とした。

現実には、木山捷平は昭和2年兵庫県飾磨郡荒川村立荒川尋常高等小学校に訓導として、また同3年同県同郡管野村立管生尋常高等小学校に訓導として奉職した後、昭和4年東京府に出向、東京府葛飾郡小松川第二尋常高等小学校に訓導として勤めているから、上記小説中の記述は韜晦的フィクションである。

木山捷平の小説には上述4例のように、作者自身の現実よりも一段と低い身分や地位の人物として設定されることが多い。それは、読者の目線から見ても、一段と低い存在に映るはずである。

いったい、人間は高位高官や権力者に対して畏敬の念を抱くが、必ずしも親愛の情を抱くとは限らない。親しみや人間的な温かみを感じたり厚意を寄せたりするのはむしろ自分よりも低い存在の人、低い地位の人に対してである。木山捷平の作品が多くの庶民に愛され、多くの読者をひきつけて離さない大きな理由の一つは、実はこうした低い身分設定にあるといえよう。

ところが世の中には、こうした木山捷平の韜晦癖を理解できず、したがって「小説」なるものの本質とその鑑賞方法さえ会得していない人が多い。しかも、文学や学術を論じ芸術を批評して、知識の乏しい一般大衆を啓蒙すべき立場にある評論家諸氏の中にさえ、こうした木山捷平文学の韜晦性に気付かず、誤った評論や解説を行っているのであ

るから嘆かわしい。例えば次の諸氏であり、いわば日本の文芸界・評論界を代表するような一流の人たちである。日本の文学ないしは学芸発展を願って、失礼を顧みずあえて指摘させていただく。(圏点は筆者が付す＝誤った個所)

- ① **小坂部元秀氏**——旺文社文庫 106『耳学問・尋三の春 他 11 編』(旺文社刊)の「解説——木山捷平小論」 251 ページ

……(昭和 7 年夏みさを夫人を伴って)城崎温泉一泊ののち捷平は「おれはこれから出石へ行って友人に逢ってくるので、お前は一人で東京へ帰ってくれ」と言っ、城崎駅で夫人と別れたという。そのあと彼は一人バスで出石を訪れ、1 年間だけ代用教員をしていた小学校に立ち寄り、「天井低き職員室」に抑え難い感慨を發している。その夜は旧知の人々と夜遅くまで語り合い「うれしき町なり。なつかしき町の人情なり。」などとしきりになつかしがって 1 泊している。……

ちなみに、この本のブックカバーにも「稚恋の思い出や代用教員時代の体験にまつわる故郷の日々、敗戦時を大陸で迎えた折の顛末、太宰治との懐しい交友、そして、亡父・妻子へのさりげない愛のかたちなどを、無類のユーモアとはのぼのとした詩心を持って描き、“人生を短編で読む”と讃えられる木山文学の佳品十三篇を収めた。」と紹介されている。

- ② **近藤信行氏**——昭和文学全集 14『上林暁・野口富士男・八木義徳・壇一雄・和田芳恵・木山捷平・外山繁』(小学館刊)の「解説——木山捷平・人と作品」 1057 ページ

彼が小説を發表しはじめるのは、昭和八年、神戸雄一の紹介で同人雑誌『海豹』に参加してからである。(中略)そのころの作品に、代用教員時代の経験を踏まえた元同僚の女性との出会いを描いた『出石』(のち『出石城崎』と改題)などがある。

- ③ **高橋彰一氏**——木山捷平作品集『玉川上水』(津軽書房刊)の「後記」 199 ページ

昭和五十年八月刊行された『酔いざめ日記』(巻末の「年譜」とも木山みさを編、講談社刊)を拠りどころに、木山捷平について書いてみたい。

木山捷平は、明治三十七年三月二十六日、岡山県小田郡新山村(現在の岡山県笠岡市)に生れる。(中略)大正 11 年 3 月に矢掛中学校を卒業して、早稲田大学進学を希望したが父の反対にあい、止むなく姫路師範学校二部に入学した。同年退学脱出をこころみたが、父に呼び戻されて果たすことができなかった。十二年春、出石小学校(兵庫県出石郡)で代用教員のかたわら詩作に励む。……

- ④ **木戸若雄氏**——海老原治善著『昭和 교육史への証言』(三省堂刊)の対談「文学教師周辺——教育と文学をめぐる」の「教育文芸社の設立」の項 137 ページ

……(大正時代に入ると)人間解放というか、教師である前に人間であれという空気が非常に強まってくるんですね。師範タイプへの反逆でしょう。大正十二年、奈良女子高等師範学校附属小学校訓導、桜井祐男が現職のまま、教育文芸社設立を全国に呼びかけることになるのです。その呼びかけの一節には、「もう私たちも、うたって

いい時機がきていると思います」とあります。(中略) 同人参加者が八二一名になっています。(中略) このなかに作家として成長し、最近なくなった木山捷平がいます。岡山出身の教師で師範出ではありません。のちに東京に出、小松川で教員になり、新興教育の関係で辞職、作家生活にとび込んでいます。……

このように木山捷平文学の韜晦性に眩惑され、現実と小説の世界との見境が分からず、誤った認識、誤った解説を施すような軽率かつ無責任な人がいるのである。作品鑑賞・作品研究(特に作品解説)に当たっては、作者についての入念な伝記的研究を行う必要があることを痛感する次第である。

(2) 出自や境遇などを劣悪なものとして登場させる。

自分の出身や生い立ち、家庭や家族の境遇などを実情よりも低く、また時には劣悪なものとして設定し、描いていくのである。こうしたことがまた、読者たちから親愛の情をもって迎えられる大きな要因の一つとなっているのである。

「尋三の春」に登場する須藤市太(小学校3年生)は貧農の息子で、しかも成績が劣等で1日中納屋におし込められるような折檻^{せつかん}を受けたり、後年は田の水のことで不覚にも相手を殴って暗い所にぶち込まれたりするような境遇の人物である。また、この作品に登場する大倉先生(新任)も、「僕が只今紹介されました大倉です。苗字は大倉ですが、家には大きい倉も小さい倉もありはしません。小さな木小屋のような藁屋があるきりです。家が貧乏だったもので、麦飯ばかり食って大きくなり、師範学校へ行ったんです。」という貧しい境遇の人物として設定されている。

「うけとり」に登場する岩助(小学校6年生)も貧しい農家の息子として設定されている。毎日うけとり(ある仕事の量を決めてそれをひき受けさせる。例えば子守、草刈り、縄^な縄、牛飼、桑摘み、松葉集め、紙袋はりなど)を強要される岩助の家庭環境は次のように描かれている。

……切羽つまった日常生活の不満は、いつも奴鳴り合いと^{いが}唾み合いとで満たされていた。——馬鹿野郎。——この餓鬼め。くたばりやがれ。こんな言葉が日夜家の中を飛散した。そうした環境の中に育った岩助は、少々の荒々しさに驚きはしなかった。が、近頃どうかすると父親が、また時には母親が怒鳴りに使う新しい言葉が一つ増えていた。——この穀潰^{こくつぶ}しめ。学校なんぞさがってしまえ。これには岩助も辟易^{へきえき}した。何と言っても家で仕事を強^しいられるより、学校に行って算術を習ったり読本^{とくほん}を読んだり、鉄棒にぶら下がったりする方が楽だった。それに今年十三の岩助は、尋常科卒業を三、四ヵ月先にひかえていた。まさかそれまでにどんなことがあっても、退学させられるようなことはあるまい。しかしその後で高等科へ上げてもらえるか否かが今は問題だった。

「抑制の日」の主人公は小学校教師をしていたが不幸にも病魔に侵され、退職して性

をつつしみながらのわびしい療養生活を余議なくされるという不運な境遇の人物として描かれている。作中では次のようにつづられ、その不遇ぶりが強調されている。

石並銀蔵は市内の公立小学校の教師を勤めていたが、肺が悪くなったと自覚して半年は辛抱した。半年の後半去年の末、医師のすすめで辞表を書いた。

彼の身よりと言えは今年三十の細君が一人あるきりだ。その外に財産と言っては田舎の墓場以外に何も無い。両親は高等小学校在学中に死んだ。高等小学校を卒えて准教員講習を六ヵ月受けた。それ以後は独学で上京したのが二十三の春。それから十二年。現在では中等教員の免状を持っている。

彼の療養方針は安静と栄養摂取、それに退職前から厳守している性をつつしむこと。転地は出来ぬので、小さいが日当たりのよい二階家を借りた。……

そして、細君は家計を支えるために自宅で「御和服仕立処」を営むとともに、お化粧をひかえたり銀蔵の気まぐれな言動に堪えたりしながら、彼の「抑制生活」に涙ぐましいまでの協力をするのである。

『父危篤』の主人公信太は父から勘当され、仕事もなく東京で借間暮らしをしているが、「チチワルシスク^カ カエレ、タンニ」という弟からの電報を受け、近所の友人から10円の借金をし、葬式のことで妻と口論したあげく急ぎ帰郷する。その信太と妻とは次のようなみじめな境遇の人物として設定され、ストーリーが展開する。

……五年前、信太は東京市公園課の雇を^{くび}に^り、胸を悪くし、郷里に帰って静養していた。村の溜池に何時も白壁を逆に映している松本医院に一日おきに通っていた。彼はまだ二十五の青年であったが、この世の立身名望を諦め捨て、体が恢復したら百姓になるつもりでいた。そんな気持ちの中で、現在の妻はその時その看護婦をしていて、彼の病気をいたわってくれているうち、村の噂がぱっと咲いた。生来の優柔に加えて身体が弱り精神のまいっていた彼は、深い判断もなく女と出奔した。それ以来、信太はこのことのために父と勘当の状態となっていたのである。

彼女は那时信太より一つ年上の二十六であった。東京に出て同棲して見ると、思いの外背が低くてぶよぶよ太った肢体ばかりが目についた。松本医院の診察室で見初めた白衣の彼女は、もう少しすらりとして言語動作にも美しいものがあるように思えたのは、リゾールの匂いにための錯覚であったのであろうか。しかし彼女は嫁入支度に四百円の貯金通帳を持っていて、信太に滋養を供給した。貯金のなくなる頃には自分である病院の薬局の口を見つけて、ずっと勤めている。拙い歌を書くより外何の取得もない信太はそれで乏しいながら今日まで生きて来た。……

「現実図絵」の主人公九鬼一造は、親からの仕送りを受けて某大学の文科に通学していたが、今年の5月、突然父親から家業倒産という悲痛な手紙をつきつけられる。退学を余儀なくされた彼は、現在区役所の選挙係として苦しい仕事に従事するという境遇の人物である。父親の手紙は次のとおり。

拝啓 本日余はそなたが大学の学業を即時放棄することを命じる。もとより業なかばにして大学を退学せよとは、言うにしのびぬものがある。余はこのことに就いて日夜懊悩を重ねた。何とかして金策を講じて見たいと辛苦した。けれども家業である醤油醸造が小資本のため年々欠損となり、遂に挫折してしまった以上、どうにも遣り繰りがつかぬのである。明細な数字は長男であるそなたにさえ、今は言いたくないから言わぬ。けれどもどうかこのような親を持ったのを不幸として観念して貰いたい。(中略) 就いては、どうか頼むからそなたはそなたで自活してくれ。銭をおくって呉れというのではない。そなたが自活さえして呉れば、余は一家の家長として専心努力、そなた以下の信二、義三、四郎、敬子、の四人の弟妹には、そなたと同様に中等教育だけは身につけさせて、^{それぞれ}夫々の進路を定めてやりたい。そうして家運も出来得る限り挽回させた上、余はこの九鬼家をそなたに継いで貰いたいのである。どうか頼むからそなたは余の言うことを聞いて自活して呉れ。(以下略)

「定期乗車券」の主人公赤間圭八は雇員という身分の下級官吏で、場末に「^{ぶき}亜鉛葺の粗笨な小さな一軒家を借り」て、爪に火をともしような苦しい生活を送っている。細君からは毎日20銭の小遣いを支給され、属官になる日を待ち望んでいる。ある日、広告で3か月定期は有利だという宣伝に接し、購入するが不覚にも紛失し、細君から罵倒される羽目となる。

「氏神様」の主人公正助は、現在代用教員として東京で暮らしているが、「自分の生まれ故郷の生家——山の中の村の、村はずれにある土塀が崩れたままの1軒の百姓家——は、今は人手に渡っている。」というおちぶれた境遇である。それに、「4年前の或る夏の夜、その時分彼は沼袋に住んでいたが、遠くベルリンからオリンピックの日本選手の活躍を伝える海外放送が行われたことがある。その時は声も小さかったので、彼は隣家との境の生垣に首を突込んで泥棒のように胸をふるわせて盗み聴きしながら、自分の家にもラジオが欲しい思いにかられたことがあった。そしてその後も、群馬県鎭川の溪川で鳴く可憐な鹿鹿の声とか、三河の鳳来寺山の山の中でなく浮世はなれた仏法僧の声とか、中継されるたび自家にもラジオ欲しい思いにかられるのであった。が、そういう衝動も結果としては、いつもその日ぐらしの貧乏の中に一抹の泡と消えていた。」といううらぶれた境遇である。さらに、正助は帰郷の途中立ち寄った茶店のおかみに神に供える「オミキ」と称して酒を所望し、快く提供されたときの心境を「おかみの親切な心に

くらべれば、何かけちくさい、人に胸の全部をさらけ出せない、都会ずれのしている自分の性根がはずかしました。」と自嘲的に吐露し、自らがいかにも軽蔑すべき人物のごとく描いているのである。

(3) 才能や能力などを劣等な人物として登場させる。

「尋三の春」における作者の分身須藤市太は、次のような劣等生として登場させ、ストーリーを展開していく。

……二年生から三年生になる時の私の通信簿は、唱歌と図画と体操と操行が乙で残りはみんな丙であった。親父が受持の先生に呼出されて、落第にしようかどうかと威か^{おど}された。親父は繰返し繰返し頭を下げた。それで、私は三年生になれることになったのであるが、そのかわり、一日中納屋におし込められてひどい目にあわねばならなかった。……

このように作中の須藤市太は落第させられそうな劣等生として描かれている。しかし、これは木山捷平の小学生時代の現実とは大きく相違している。筆者の調査によれば、木山捷平は小田郡新山小学校で成績優秀、卒業時は優等生（同学年の優等生は男子4名、女子3名）であり、矢掛中学校在学中も10番～20番前後であったのである。こうした木山捷平の自虐にも似た自己卑下意識ないし韜晦癖は、小説の中だけに表出されるのではない。彼は自伝随筆「わが半生記」（永田書房刊『わが半生記』所収）にも、「明治三十七年三月二十六日生れの私は、クラスの中でビリから二番目の生徒だった。背も低く知能も劣っていた。この偶然的な運命が私の一生を支配していたのかも知れないのである。」と述べ、自分が人生のスタート時点から劣等で、あたかも落伍者的存在であったかのごとき口吻で自らを語っているのである。あるいはまた、友人や初対面の人に対しても、自分がいかにも劣等な人間であり、無能力者であるかのごとく吹聴する。

こうした木山捷平の韜晦癖に眩或される人も少なくない。例えば有本芳水（詩人・実業之日本社取締役）は、その著『新版岡山文学アルバム』（日本文教出版社刊）の「木山捷平」の項で、「矢掛中学をビリで卒業したというのが自慢であるが、そのときの優等生は麻生種衛氏（今は故人、六高教授でトーマス・マンを専攻）であり、藤原審爾が岡山時代に出した同人雑誌にこのトップとビリが揃って同人になったのは奇遇である。」と、木山捷平の「ビリ」を肯定して解説しているのである。

こうした木山捷平の韜晦意識は自らの家族（特に父親像）を語る際にも表出される。例えば、随筆「わが文学修業記」（『わが半生記』所収）や「わが文学の故郷」（『自画像』所収）に次のようにつづっている。

私の父は貧しい一農夫として一生を終った。（中略）私が小学生の頃、父は朝寝坊

で毎朝十時頃まで寝ていた。文壇に名を馳せることはもはや諦めていただろうが、それでも夜は一時二時頃まで机に坐って書物をよんでいたりしたから、鶏とは一緒に起されぬのである。或る日、学校で先生が皆さんのお父さんは、今朝皆さんが学校にくる時何をしておられたか、という質問をした。私にもあたったので、私は、まだ寝て居られましたと答えると、教室中がわれるように哄笑したことがある。その位だから畑にはいつも作物よりも背の高い雑草がしげっていてひとびとはその或る背の高くなる雑草のことを木山草とよんだ。田圃の稲が正月になっても刈り取られず、穂がくさって台なしになったこともある。（「わが文学修業記」——小説「修身の時間」にも同様の記述あり）

私の父の畑には、作物よりも背の高い雑草が、年中野原のやうに繁茂して一種の盛況を呈してゐた。「上農は土を作り、中農は米を作り、下農は草を作る」といふ金言があるがこの金言にあてはめて言ふと、私の父はこの下農に属した。作物と雑草の見分けさへ十分にできなかった。晩年には雑草はおろかのこと、松の如き大木を生やしてゐたから、下農の部へさへ入れてはやれぬかもしれない。かういふ百姓であるから私はその頃、子供心にも祖先や世間に対して申し訳ない気がして自分の父がよその家の百姓のやうに勤勉になって呉ればよいと、そればかり念じた。篤農とまでは行かなくとも、まづまづと普通程度になってくれればよいと、朝晩思ひつづけた。（「わが文学の故郷」）

上掲2編の記述は事実と著しく相違している。木山捷平の父君静太氏は村（小田郡新山村）の収入役を務めていたが、農村疲弊の現状を見るにつけ、農村振興策は現金収入の容易な果樹園芸に如くはなしとの信念から、28歳（明治39年、捷平2歳の時）にして職を辞し、自ら山野を開墾して果樹栽培に精励した。桃・柿・梨・栗などの種苗作りに意を注ぎ、特に水蜜桃の品種改良に全身全霊を傾注した。桃の実生の苗木を育て、これに各種の交配を重ねて育成した苦心の枝木を接木し、豊穰甘味な桃の種苗作りに精魂を傾けた。岡山名産の水蜜桃作りの元祖は、ほかならぬ木山捷平の父君だったのである。そして木山育種の水蜜桃は格別味がよいと好評を博し、この種苗を求めて熱心な生産農家が近郷近在から集まった。その噂はたちまち県外に広まり、全国各地から注文が殺到、静太氏は実直に対応したので絶対的な信用と称賛を受けた。今でも木山捷平生家（笠岡市教育委員会が管理）の長押には「木山園」という大きな扁額が掲げられているが、これは某県の果樹園芸篤農家が、その功績を称え謝意を込めて贈ったものである。

このように勤勉誠実に農事に精励した父君を、木山捷平が上記2編の記述のように怠惰な人物として描いているのは捷平独特の韜晦癖の変形した肉親卑下意識の所産といえよう。

3 韜晦性の深化

木山捷平文学における韜晦性ないしは自己卑下意識はさらに進行すると、自らの分身である主人公を極度に虐げるいわば「自虐性」へと発展する。例えば「氏神様」では、「正助」を次のようなみじめな人物として登場させ、ストーリーを展開させていく。

五年前のこと——彼はまだ三十歳そこそこの若さで急に原因不明の神経痛が突発、足腰がたたなくなり、四谷にある或る小さな病院に入院したことがある。この時彼はその病院の看護婦見習に來ていたハツに糞尿の世話までかけているうち、二人は出来合ったのである。出来合った言えば人聞きはいいが、小説などによくある清い恋愛があったとはかりそめにも言えぬのだった。二人はある夜ある公園の木陰で身の振り方の相談をしていた。ところが、神罰というか悪運というか、二人は風紀紊乱の嫌疑でぐわっと警察にもって行かれた。もって行かれて嫌疑はすぐ解けたが一晩暗いところに彼は抑留され、それが間もなく同宿者の口から世間にひろがってしまったのである。すると今度は、仮初にも教職にあるものが警察に留置されるとは言語道断だという上司の見解となり、彼はあっさり首を切られてしまったのである。そういう羽目の中で二人は家を持ち……

そのほか木山捷平の作品には作者の分身ともいうべき主人公を初め登場人物が、愚図で、間抜けで、頓馬で、軽率で、不器用で、失態や醜態を演ずる場面が数多く描かれている。

例えば、「人差指」では、妻を同伴して外出するとかつて入院していたとき、自分は独身だと言って欺いた看護婦に出会い、きまりの悪い思いをする。また湯治のため山国の温泉に出かけるが、そこで宿の案内してくれた女性が実は売春婦であったのに、それを見知らずつい気を許していた自分の迂闊さ、さらには温泉そのものが自分の人差指の傷の治療には全く効果のないことが分かったという自らの度重なる失態ぶりを描いている。

「竹の花筒」では、「おとうさん」と題する息子の作文を通して酒好きでぐうたらな父親像を表出している。「骨さがし」では、朝寝をしているところへ知り合いの女性が訪れたので室内を掃除してもらっていると、寝小便したあとを見つけられ恥ずかしい思いをする。「弥次郎兵衛」では、電気湯わかし器のスイッチを切り忘れ、あわや火災寸前の事態をひき起こし、周章狼狽する。——これらの作品群は「韜晦性」がさらに変形した「戯画化作品」といってもよく、ユーモアを醸成する大きな要因となっている。

人々は、弱小なもの、不遇や不運をかこつ人、あるいは社会の片隅で悪戦苦闘している人に対しては同情を寄せ、厚意を寄せ、共感や親愛の情を抱くものである。木山捷平の文学が多くの人に愛され、多くの読者を惹き付け、多くのファンを獲得しつづけているのは、木山文学の基調ともいうべき韜晦性（自己卑下性、自己戯画化性、自虐性を含む）に負うところが極めて大きいのである。

Self-effacement in the Literature of Shohei Kiyama

Tsuneji SADAKANE

Courses in Japan Studies for Students from Overseas

Kurashiki University of Science and the Arts

(Received October 1, 2012)

Shohei Kiyama (1904-68), who was awarded the 1962 Minister of Education's Art Encouragement Prize, is an author with a strong and versatile personality. Therefore, various names can be given to his literary quality. For example, he is called with many characteristic words, such as "a novelist of the *Buraiha* or Decadent School," "a humorous novelist," "an unconventional novelist," "a plebeian novelist," "an uncompromising novelist," "an anti-war novelist," "a novelist of nostalgia," "a self-depreciating novelist," "a didactic novelist," "an expert in drinking and alcohol-loving literature," "the top of pastoral literature," and so on. His works are enjoyed by many readers, and the popularity is increasing year by year.

Furthermore, his works remarkably include *Tokisei* in Japanese (a disposition to conceal one's great talents) or *Tokosei* (a tendency to prevent one's talents and virtues from being manifested). That is to say, Shohei Kiyama wrote his novels, portraying his main characters, parts of the author's personality, as inferior persons of much humbler standing or in worse circumstance than he really was.

This paper focuses on this aspect of Shohei Kiyama's literature, discussing his *Kokaiheki* (an inclination to conceal one's talents, having high ideals) or *Tokaisei* (a disposition to conceal one's talents and learning).